

## ブレイクとその抒情詩 (2)

宝 亀 莞 爾

Songs of Innocence は、前にもちょっと触れたように、自然と人生にたいする愛と歓びの詩集であり、いまだこの世の喜怒哀楽さえも弁えぬ無心のところを歌った詩集である。純情と愛と平和の象徴である子供と羊と神の賛美にみちた童謡集であり、透明かつ単純で甘美な佳什にあふれた詩集である。つまりこれは、H. M. Margoliouth も言うように、かれの Lyrical Ballads なのである。そして、

Both aim at and achieve simplicity, and not only in language. As Wordsworth tried to show what is fundamental in human nature by poems about the unsophisticated whether young or old, a mad mother, an old huntsman, a child of eight, so Blake opens a window on to reality by poems about or for children, children in years in the first place but also adult children and then children unborn. Most of the SONGS OF INNOCENCE are sublime nursery rhymes. (William Blake, p.51)

赤んぼの生れたのを見て歓喜した Blake は、次のように詠じた。

## Infant Joy

'I have no name:

I am but two days old.'

What shall I call thee?

'I happy am,

Joy is my name.'

Sweet joy befall thee!

Pretty Joy!

Sweet Joy, but two days old.

Sweet Joy I call thee:

Thou dost smile,

I sing the while,

Sweet joy befall thee!

じつに、歓喜そのもの、生後間もない天使のようなえい児をうたった清純可憐な歌である。言葉は子供のようにあどけなく単純であるけれども、その中には無限の意味があり、微妙なえい児の喜びを巧

妙に写している。B. D. Selincourt は次のように言う。

This joy was Blake's inspiration, and as life opened wider aspects before him, and he grew conscious of his inspiration and was able to reflect upon it, the same joy became his gospel. He preached the gospel of Innocence. (William Blake, p.33)

そして、子供たちが自然を眺めて発する歓喜の笑い声をきいた Blake は、

When the green woods laugh with the voice of joy,  
And the dimpling stream runs laughing by;  
When the air does laugh with our merry wit,  
And the green hill laughs with the noise of it;

で始まる 'Laughing Song' をうたうのである。時は春、緑の森は笑い、川はえくぼを浮べて流れて行く。小鳥は鳴き、果物までが喜びにみちているようだ。人が笑えば、山も笑ってこだまを返す。かく喜びにみちみちている子供には、一切の自然が自分とともにことごとく喜悅にみちているように思われる。われわれもいつしかその 歓喜にさそい込まれて、われ知らず哄笑したくなるような歌である。

幼年時代を題材としてうたった多くの詩人の中で、最もかれに近いものを求めるならば、おそらく上述の Wordsworth であろう。わが国にも童心をうたった詩人は多い。フランスの Victor Hugo (1802—95) もよく子供の崇拜者だと言われ、その純潔な心を客観的にとらえ、子供にたいする愛をうたいあげた詩人であると言われている。しかし Wordsworth は、Hugo と異り、子供を単に客観的に見たばかりでなく、その心の中にわけいり、みずから子供の言葉をもって物語ることのできた詩人である。われわれは Wordsworth の子供にかんする詩を読むばあい、Hugo のばあいのように、ただ芸術家としてのかれを感じず、あたかも子供じんの声を直接きくような気がする。この点、Wordsworth は他のいかなる詩人よりもいっそう Blake に近いと言わなければならない。しかしながら、われわれがこの二人を対照して考えるとき、両者の間にはまた相当の相違があることを知るのである。すなわち、Wordsworth のばあいには、子供時代の無邪気な思想と単純な信仰とをすでに通りこして、もはや成人した大人の声を多くきく思いがするのである。

Wordsworth は 'We are Seven' において、生死の境をわきまえない小児を見て、

—A Simple Child,  
That lightly draws its breath,  
And feels its life in every limb,  
What should it know of death?

とおどろき、また、荒野にさ迷う孤独な少女を愛して、

Oft I had heard of Lucy Gray:

And, when I crossed the wild,  
I chanced to see at break of day  
The solitary child.

No mate, no comrade Lucy knew;  
She dwelt on a wide moor,  
—The sweetest thing that ever grew  
Beside a human door!

とうたう。あるいは孤児となった 'Alice Fell' を憐むのであるが、これらはみな子供に対する大人の情操であって、子供じしんの情操ではない。

Blake の子供をうたった作品には、このように、心理学的ないし瞑想的な分子はつゆほどもない。かれの直観的な想像力は、ただ子供の目に映るものを、じかにそのまま見るのである。かれの描く子供たちは、周囲の人びとを信頼して、自由の天地にたわむれ、愛のことばを反復して満足するのである。かりにも、理性に訴えたり、瞑想にふけったりするようなことはない。したがって、かれの描いた子供は、その生れ出た世界に永遠の生命として生存し続けるような印象すら与える。

Wordsworth は 'The Pet-Lamb' の中に、一人の少女が一匹の小羊を石につないで、この従順な動物に食物を与えている光景を描いている。少女の手から食物を求めている小羊は、喜びのあまり尾を振り、少女のことばに耳を傾け感激しているようにさえ見える。

"Drink, pretty creature, drink," she said in such a tone  
That I almost received her heart into my own.

やがて少女はこの場を立ち去る。しばらくして後ろをふり返ると、小羊は綱をとき彼女のあとを追おうとしている。この有様を見た少女の心はたちまち無限の感慨に耽るのである。そしてこの少女の顔に現われる感情を描いて、Wordsworth は次のようにうたう。

What ails thee, young One? Why pull so at thy cord?  
Is it not well with thee? well both for bed and board?  
Thy plot of grass is soft, and green as grass can be;  
Rest, little young One, rest; what is't that aileth thee?

少女は、おもむろに、この小羊をきとして、その美と力とを称揚し、その糧となるべきまぐさの畑、風雨をしのぐべき森を教える。加えて過去の楽しさと、彼女の与えた保護とを物語って、ひたすら慰めを与えようとするのであるが、小羊の悲しみは容易に癒すべくもない。

少女はついにこの小羊を見捨てて帰るのであるが、彼女の胸中に去来するものは、この孤独な小羊を苦しめる悪夢と、その奥にひそむ希望とである。Wordsworth はこの少女の姿を眺めて、下のよう

にうたい続ける。

And it seemed, as I retraced the ballad line by line,  
That but half of it was hers, and one half of it was mine.  
  
Again, once again, did I repeat the song;  
“Nay,” said I, “more than half to the damsel must belong,  
For she looked with such a look, and she spake with such a tone,  
That I almost received her heart into my own.”

Wordsworth の想像する世界は、このように、われわれが日常経験する愛の世界であり、普通の生活にあらわれる美の世界である。Blake の想像する世界は、このような現実の世界ばかりでなく、子どもが神を想像し、天使を考えるばあいに想像する不思議の世界をもふくんでいる。

### The Lamb

Little Lamb, who made thee?  
Dost thou know who made thee?  
Gave thee life, and bid thee feed,  
By the stream and o'er the mead;  
Gave thee clothing of delight,  
Softest clothing, woolly, bright;  
Gave thee such a tender voice,  
Making all the vales rejoice?

Little Lamb, who made thee?  
Dost thou know who made thee?

Little Lamb, I'll tell thee,  
Little Lamb, I'll tell thee:  
He is called by thy name,  
For He calls Himself a Lamb.  
He is meek, and He is mild;  
He became a little child.  
I a child, and thou a lamb,  
We are called by His name.

Little Lamb, God bless thee!  
Little Lamb, God bless thee!

子供を題材としてうたった Wordsworth の詩は、単純素朴であるけれども、これを Blake に比べると、なお、複雑の感を免れない。そして、用語の点でも、似ているけれども、なお、同一ではない。Wordsworth の字句は、よく批評家の言うように、極めて単純なものではあるが、Blake に至ってはさらに単純だと言える。かれは子どもの清純な美しいことばを用いたばかりでなく、同一の語句を幾度も繰り返して、あたかも、子どもの話そのもののように書いている。しかも、かれ独得の抒情詩の力を立派に発揮しているのである。Blake は子供と小羊を神の化身として愛しかつ賛美した。したがって、野の小羊は、かれにとっては、単なる比喩ならぬ象徴、いな神の写しであるとしか考えられなかった。子どもの心を心とした Blake の描く子供は、いかにも単純な子どもらしいことばで小羊に話しかけ、お前を造ったのはだれか、それはお前と私との名をみ名としたもう神様だと教えるのである。古来子供を愛しかつ賛美した詩人は多いが、かれのように真に子供の心になりきって子供のことばを語りえたものは少ない。

幼児が小羊に話しかけていることばは単純素朴をきわめ、前述のように、子どものことばそのままに無頓着である。しかもそのことばは単純にして微妙、素朴にして意味深長である。この詩は Songs of Innocence 中、もっともすぐれた作品の一つであるばかりでなく、常にこの詩集の象徴として、Songs of Experience を代表する 'The Tiger' とまことに著しい対照をなしているのである。また Blake は、このように、あまり修辞法に拘泥せず、ときには文法さえ無視していると思われるようなばあいもあって、論理的統一を欠き、文章として不完全なものもある。Songs of Innocence は Blake が綿密に校閲したものであるが、なおかつ、このような誤謬があるとすれば、あるいは、これは作者の故意ではないかとさえ思われる。なぜなら、不注意な字句の使い方は、子どもの話を暗示する巧妙な手段であるからである。

Wordsworth は頑固な小供じしんの物語でさえ、決してこのように不統一な修辞法を用いることはない。その上、われわれが子どもの時代に経験する印象でさえ、おとなの頭で推理して述べているのである。すなわち、Wordsworth の描いた少女は成人した人間の考えであるが、Blake の描いた少女は、みずからは理解することのできない思想感情をただ漫然と感ずるだけであって、過去を追憶することも、将来におもいをいたすこともないのである。Wordsworth は子どもの素朴な心に湧きでる思想や感情を、一度自分の思想感情の中に取り入れ、なかばこれを自己のものとして表現するために、いきおい瞑想的となり、かれ独得のゆううつ性を帯びてくる、と思われるのである。C. H. Herford は次のように述べているが、われわれは Coleridge を Blake に置きかえてみることができる。

As a poet of childhood, Wordsworth, as we have seen, owed something to Coleridge—after Blake the the first great poet of child-life. Yet his work here is in a kind altogether his own. His children are rarely touched with the exquisite tenderness of Coleridge, but with a kind of solemn joy, passing often into mystic awe. Their beauty makes him glad, but he never rests in that simple mood. (The Age of Wordsworth, p.160)

これに反して、Blake は子どもの純真無垢なまなこに映じた幻の世界を、大人の潤色を加えず、そのままに描き、それによって子どもの自然の姿を浮彫りにする。それゆえ、Wordsworth の描く子どもは、そのためにむしろ現実的で、われわれが日常周囲に見かける子どもたちである。そして、Blake の子どもは、われわれが夢幻の世界で出逢う天籟の子どものような気がするのである。

子どもにかんする Blake の考えは、子どもを持った経験のないかれ自身の想像力から出たことは前述の通りである。そして、

This joy was Blake's inspiration, and as life opened wider aspects before him,  
and he grew conscious of his inspiration and was able to reflect upon it, the same  
joy became his gospel. He preached the gospel of Innocence. (Selincourt, p.33)

しかし、かれは現実の子どものいろいろ複雑な性質をことごとく把握しえたのではなく、その性質の中のおもな感情だけを捉えたようである。子どもの時代には、理性の力もなく、わずかに動物的本能によって行動するものであるが、その動物的本能こそ、Blake にとって、永遠の光とも見えたのであろう。

われわれの理想とする永遠の世界が、はたしてこの世に実現しうるとすれば、それはわれわれの子どもの時代をおいて他にない。一切の罪惡を知らない子供時代の完全な幸福をうたったものとして、さきに 'Infant Joy' と 'Laughing Song' とを引用したが、第二の要素ともいべき絶対無邪気の感情をうたったものとして、'Nurse's Song' を引用したい。

When the voices of children are heard on the green,  
And laughing is heard on the hill,  
My heart is at rest within my breast,  
And everything else is still.

'Then come home, my children, the sun is gone down,  
And the dews of night arise;  
Come, come, leave off play, and let us away  
Till the morning appears in the skies.'

'No, no, let us play, for it is yet day,  
And we cannot go to sleep;  
Besides, in the sky the little birds fly,  
And the hills are all cover'd with sheep.'

'Well, well, go and play till the light fades away,  
And then go home to bed.'

The little ones leaped and shouted and laugh'd  
And all the hills echoed.

この詩には、すべて本能のままに行動し、いやしくも自由を束縛するような命令には全く耳をかさず、なんらの法則によってもしばられることのない、自由の天地がうたわれている。これが、とりも直さず、無邪気から生れる幸福の世界だと、Blake には思われたのである。暗くなるまでのわずかな間を遊ぶことを許されて喜ぶ子どもたちを、これほどみごとに歌いあげた詩人は Blake をおいてもう多くはあるまい。

かれは 'Holy Thursday' の中で、さらに純真無邪気の性情をうたっている。キリスト昇天節の日、セント・ポール寺院に礼拝に行く無心可憐な慈善保育児をうたった作である。その顔には、慈悲の尊さと愛の普遍性が感じられる。

'Twas on a Holy Thursday, their innocent faces clean,  
The children walking two and two, in red and blue and green,  
Grey-headed beadles walk'd before, with wands as white as snow,  
Till into the high dome of Paul's they like Thames' waters flow.

O what a multide they seem'd, these flowers of London town!  
Seated in companies they sit with radiance all their own.  
The hum of multitudes was there, but multitudes of lambs,  
Thousands of little boys and girls raising their innocent hands.

このように無邪気な性情からのみ、はじめてほんとうの本能の生活は生まれる。本能の生活は、すなわち、自然の生活である。そして、この生活を完全に行うためには、親しく自然に接し、これに感応しなければならない。Songs of Innocence に描かれた自然は、いわば Blake の独創の世界であって、その中に介在するすべてが神秘の光におおわれ、Innocence の symbol をなしている。そしてこの Innocence には超自然的な要素が多く、あたかも Raphael その他の絵に見るように、多くの天使が集ってきて、揺らんに眠る子どもの周囲をとりまき、楽しい夢を結ばしめるのである。また、ひとり天使ばかりでなく、神様じしんも降ってきて、不幸なもの、あるいはこの現実の生活にたえない弱いものを愛撫し、かつ神の祝福を知らしめるのである。もちろんこれは、理知に長じたわれわれ大人の目から見れば、単なる空想の世界としか思われまいであろう。しかし、子どもたちにとっては、けっして空想ではなく、生きた現実であり真実なのである。永劫の世界に生きてきた子どもたちには、やはり、永劫の世界がある。この永遠の世界が消え失せないかぎり、やはり、子どもたちは天使の声をきき、その翼の音をきくであろう。

Blake は 'The Little Boy Found' において、神が迷える子どもの父親としてあらわれ、その手をひいて、なき叫ぶ母親のもとへ連れてゆくさまを描いている。かれの神の愛および加護にたいす

る信仰がうかがえる。

The little boy lost in the lonely fen,  
Led by the wand'ring light,  
Began to cry; but God, ever nigh,  
Appear'd like his father, in white.

He kissed the child, and by the hand led,  
And to his mother brought,  
Who in sorrow pale, thro' the lonely dale,  
Her little boy weeping sought.

これは Blake の好む題材であるが、他の詩においても、神が子供の悲しみや小鳥の悲哀を慰める有様を描いている。このことは、とりもなおさず、天国の訪れを暗示したものに相違あるまい。そして、やがてこの種の悲哀は消え去り、歓喜が訪れるのである。

He doth give His joy to all;  
He becomes an infant small;  
He becomes a man of woe;  
He doth feel the sorrow too.

.....

O! He gives to us His joy  
That our grief He may destroy;  
Till our grief is fled and gone  
He doth sit by us and moan.

(On Another's Sorrow)

広大なる恵みを有し、常に弱者の保護を掌る神は決して子供を見捨てることはない。永久にこれをいたわり、愛撫し続けるのである。善良であり敬虔であるかぎり、かならずこれを救いたもうのである。これが Blake の信念であった。

‘The Chimney Sweeper’の主人公である子供の煙突掃除夫が、卑しい仕事を意とせず、これに幸福を見出すのは、もっぱら神の慰めによるものである。この詩は ‘The Little Black Boy’ 等とともに、この詩集には珍らしい宗教的ないし思想的な作品である。当時、産業革命の結果、多くの少年労働者が出たという。幼くして母に死に別れ、無慈悲な父に金で売られて煙突掃除人になった子供が、寒風の中を一日中親方にこき使われている姿はいかにもいじらしい。子供はよく火気の冷え切らぬ煙突の中で怪我をすることがあったという。この詩は独白体で、新参の Tom Dacre が巻毛の頭を剃ら



れて泣き出したので、かれはそれを慰めてやる。Tom はその夜恐ろしい夢を見た。しかし、天使に救われて、黒いひつぎの中から飛び出し、飛んだり、はねたり、笑ったりして緑の野をかけ回り、流れて体を洗い、光を浴びてかがやき、まっ白の裸体で天に上り、風の中で遊びたわむれる。そして、立派に神の子になれるという確信を得てかれは目をさます。それからかれのすす払いの第一日が始まるが、そこにはもう不平も不満もない。ただ勤めを立派に果しさえすれば、必らず神の加護が得られるのである。このような信仰と愛は子供のものであり、それは想像の世界にのみ存在するものである。Tom を自由の天地に解放するのは、輝く鍵を手にした天使であって、かれの夢にあらわれる多くの子供たちを閉じこめる黒いひつぎは、もちろん実際のひつぎではなく、かれらを社会的ないし霊的な死に幽閉する一種の coffin と解すべきであろう。

Blake は The Book of Thel (1789) に述べているように、われわれの肉体はわれわれの魂を宿すかりの宿にすぎないと考えていた。このことは始めに書いた。‘The Little Black Boy’ にあらわれる根本思想は、とりも直さずこの考えで、かれはこの世におけるわれわれの生存の理由を解釈して、次のようにうたっている。

‘And we are put on earth a little space,  
That we may learn to bear the beams of love;  
And these black bodies and this sunburnt face  
Is but a cloud, and like a shady grove.  
  
‘For when our souls have learn’d the heat to bear,  
The cloud will vanish; we shall hear His voice,  
Saying: “Come out from the grove, My love and care,  
And round My golden tent like lambs rejoice.”’

キリストの説いた愛の教えがあまねくゆきわたり、人種的偏見のなくなる理想の世界を希求することを黒人の子供に託して述べたもので、限りない人間愛のあふれた詩である。

当時は皮肉にもヨーロッパのキリスト教国で、アフリカの黒人を売買することが行われていた。Wilberforce 等の尽力でその反対論が起り、議会の問題にもなったが、廃止案はついに成立しなかった。Blake がこの非人道的行為を憎みかつ憤ったのは当然である。なおこの間の消息は、1785年公にされは Cowper の The Task 第二巻、ないし Wordsworth の To Thomas Clarkson (1807) に詳しい。この母親は子供に温かい接吻を与え、のぼる朝日を見つめながらいろいろと教える。永遠の光とも思われる愛の太陽は、朝霧の中に光と熱とを包んでいる。子供はこの太陽の直射にたえ得るようになるまで、緑の木蔭で、あつい陽を避けながら、母親の教えをうけなければならない。Swinburne はこの詩を、

a poem especially exquisite for its noble forbearance from vulgar pathos and

achievement of the highest and most poignant sweetness of speech and sense; in which the poet's mysticism is baptized with pure water and taught to speak as from faultless lips of children, to such effect as this. (William Blake, p.115)

と述べ、次に挙げる 'Night' とともに、

the two poems of softiest loveliness among all the 'Songs of Innocence' (ibid.)

と称賛している。

そして、この 'Night' も同じ思想の現われだと思われる。陽は沈み、鳥は巢につき、月は夜の世界をほほえみながら静かに照らしている。丘の森も、野の花も、羊の群れも、いまは夜の祝福をむさぼっている。天使が静かに舞いおりて、平和な安息をすべてのものの上におくるのはこの時である。かくて獅子も狼もその鋭い牙をおさめ、

And there the Lion's ruddy eyes  
Shall flow with tears of gold,  
And pitying the tender cries,  
And walking round the fold,  
Saying 'Wrath' by His meekness,  
And, by His health, sickness  
Is driven away  
From our immortal day.

And now beside thee, bleating lamb,  
I can lie down and sleep;  
Or think on Him who bore thy name,  
Graze after thee and weep.  
For, wash'd in life's river,  
My bright mane for ever  
Shall shine like the gold  
As I guard o'er the fold.'

このように、広大無辺の神の愛はよく鳥獣の世界にまで及び弱者をまもり、荒きをやわらげ、やがてこの世を隣みんと平和の世界に化すというかれの信仰をのべたものである。

ところで、さきに詳しく述べ、また 'The Little Black Boy' の始めでもちょっと触れたように、Blake は、われわれの肉体を単なる魂の仮りの宿にすぎぬと考えていた。われわれがこの世に生をうけているのは、やがて永遠の世界にかえって、再び神の愛をうけるための準備としての旅をしている

のだ、と考えたのである。われわれが肉体の力によって感得しうるものは、永遠の世界の一部であって、その全部ではない。しかし、われわれがひとたびこの仮りの旅路を終えれば、やがて、この永遠の世界には入り、神の栄光を全身に浴びることができるのである。すなわち、われわれが 'shady grove' には入った時、はじめて、陽の光に眩惑されることなく、すべてを見ることができるのである。この思想は、Blake の熱烈な神仰から湧き出たもので、この点においては、すでにかれは宗教家の域には入りつつあった。かくてかれの思想はしだいに神秘の色を深めてゆき、やがて純粹の抒情詩の世界を逸脱して行くのである。ふたたび Swinburne のことばを借りよう。

There are two points in the work of Blake which first claim notice and explanation; two points connected, but not inseparable: his mysticism and his mythology. (p.104)